第 137 号
2014/11/23 発行

小網代の森と干潟を守る会

小網代 森と干潟つうしん

モリちゃんとガタくん干潟デビュー

森も海も干潟も 奇跡の集水域生態系を未来の子どもたちへ
小網代の森と干潟を守る会
〒238-0111 神奈川県三浦市初声町下宮田 261-5
代表　高橋 伸和　　E-mail: info@koajiro-higata.com
TEL.046-889-0067（仲澤）
URL: http://www.koairo-higata.com
年会費：一般会員￥1000　賛助会員￥5000（入会金不要 7月～6月）
郵便振替： 00260-4-21569　小網代の森と干潟を守る会

第 122 回自然観察＆クリーン

小網代の植物を楽しむ！

小網代の森が、今年７月２０日に目出度く一般開放され、連日大勢の方が訪れているようです。

そんな中、１０月２５日好天に恵まれ、『植物をテーマ』に定例の観察会が開催されました。

参加者は３１名でしたが、さすが今回は３分の２は初めての顔ぶれでした。

三崎口駅からウォーミングＵＰを兼ねて、上流部森の入り口まで歩きました。

何分、今回の観察会はボードウォークが整備されてから初めての事で、季節的にも花らしい花は殆ど見られない！　紅葉にも早過ぎる！　サア、どうしよう。

そこでまず、こうした晩秋の森でも十分楽しめるということを知って貰うために

① 歩きながら主だった植物を随時説明する。
② この森で、今年の春から特に見られたものに的を絞る。
③ 現物がすでに枯れて、見られないものは写真や標本を活用する。

そんな観察会のトップバッターとして、参加者の目を楽しませてくれたのは、森の入口にあった『コブナグサ』ですが、なんと葉が小鮒（コブナ）の形をして愛らしい。こんな野草が足元にあったにもかかわらず気づいた方は多分いないようでした。

次に、この時期に花がつくタデ科の植物、イヌタデ、ハナタデ、ボントクタデの違いをじっくり覚えていただきました。

中流域までの道脇ではアシボソ、ジュズダマ、アシ、オギについて特徴を調べました。

ヤナギテラスで小休憩した後、自分が今年の春、見慣れない植物で何という植物か決めるのに手こずった物について写真と標本で説明しました。

まず、タコノアシ、チョウジタデ、タカサブロウの葉脈と葉の形が良く似ていたということ、アキノウナギツカミについては秋、花が付くまで名前が決められませんでしたし、池の出現でタマガヤツリ、アゼガヤツリなどカヤツリグサの仲間が多かったなども紹介しました。

エノキテラスでゆっくり昼食をとり、午後からは約１時間、現在も池の周りに残っていた湿生植物を観察しました。

池の周りに出てきた植物のいくつかは、２０年程前にこの森でも

時々散策路脇で見られたのに、その後、笹や潅木が生い茂り、森全体の乾燥化などの理由でずーと姿が見られなくなっていた植物が、ここで一気に『撹乱依存戦略』をとる、つまり『埋蔵種子の発芽』という形で姿を表したのですから、びっくり仰天です。

具体的には、オモダカ、タコノアシ、コナギ、アキノウナギツカミの現物を観察し、ミズオオバコ、サンカクイ、カワヂシャ、イヌホタルイ、ミズハコベ、シャジクモについては、写真と標本で確認していただいた。

特に此処のオモダカは、格好が良く葉が細くアギナシとそっくりだが、よく調べたらホソバオモダカということらしい。また、すぐ隣の湿地は、汽水域（海水と淡水が混じる）になっていて、他とは違う種類のカモノハシ、シオクグ、ナガボテンツキなど貴重な植物があることを写真で説明した。

なお、小網代の森は１ヶ月訪れる月がずれるとまったくちがう植物が見られるのも特徴のひとつですが、いずれにしてもお勧めの季節はやはり春先ですね。

最後に、本日、かなり見られたイネ科、カヤツリグサ科などについて、植物の名前を調べるのは相当難しいけれども、自分で一つずつ調べると本当に面白い分野と考えているので、いつも、参考にしている図鑑などを紹介して本日の観察会はどうにか無事終了しました。

（文･鈴木清市　写真・小倉雅實）

ご参加の皆さまからのメッセージ

初めて「森」に来ました。大切な自然を大事にしていきたいです。

K.A さま

とても楽しかったです。スタッフの方々のご苦労は大変でしょう、これからも頑張って下さい。参加する事で頑張らしてもらいます。

K.K さま

「かく乱戦略で『小網代の森』の植生がますます豊かになった」との実地説明を見聞し、感動しました。植物図鑑を購い、一人でも訪れたいと思います。

A さま

久しぶりに訪れた小網代の森で貴重な自然が保たれ、小さな草花をくわしく説明が聞けて楽しかったです。また春に訪れたいです。

T さま

たのしみました。

S.S さま

よかったです

T.I さま

植物の多い小網代を知ることができて、参加できてよかったです。幼いころの草花で遊んだことがなつかしくなりました。ありがとうございました。

S.K さま

植物の話し、楽しめた日になりました。ありがとうございます。

T.H さま

小川がサラサラと気持ちいいよくぞ残っていました

K さま

久し振りに来ました。人が多く、人気があるにもかかわらず、自然が保全されていてホッとしました。

H.A さま

オープン以来4度目のボードウォークですが来るたびに新たなものにめぐりあって楽しい森です。イネ科、カヤツリグサ科、水辺の植物など、その一角にふれるだけで、多様な所を改めて感じました。

K.S さま

10 年ぶりくらいに小網代の森へ来てみました。地元に暮らしていてもなかなかチャンスがなかったのですが、本日はお天気もよくて“大正解”です。そして入会させていただきました。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

J.I さま

いろいろ教えていただいてありがとうございます。とてもおもしろかったです。

Y さま

鈴木先生の説明は良く解りました。ありがとうございました。

H.N さま

とても楽しい 1 日でした。花のいっぱい咲くころまた来たいです。保存会のみなさんご苦労さんです。

S さま

オモダカに会えて嬉しい！

T.K さま

しらない事だらけで楽しかったです。又、夫をつれて来たいです。

S さま

実物ばかりでなく、押し花や画像を多くご用意いただき、野草の楽しみ方が分かり、大変楽しい講義でした。ありがとうございます。

N.I さま

随想　小網代てんてん ⑮

引橋と北原白秋

須田漢一

三浦市内にのこされた、「白秋文学コース」の北限といわれる「ひきはし」を訪ねて、京急三崎口駅から目的地に向かう。

引橋は、かつて三浦一族の新井城（あらいじょう）を守る要害の地で、北方からの敵に攻められたとき、谷に架けた橋を引いて侵入を防いだ、といわれ現在は陸橋になっている。

歩道を、ゆるいカーブで下ると、道の傍らに目的の歌碑があった。

「引橋の茶屋のほとりをいそぐとき
　ほとほと秋は過ぎぬと思いき」

北原白秋は、明治期から昭和初期にかけて象徴的・印象的な手法で新鮮な感覚・情緒あふれる作品群と「赤い鳥小鳥」や「からたちの花」など多くの童謡を作った詩人・歌人だった。27歳の時、ある事情から三崎に移り住んだ。

苦悩に満ちた危機を負った白秋に、相州三浦三崎は海光、日光、野菜、魚鱗のあふれる好適な土地だった。この地で放胆な力と熱のあふれる生活を送ったことが、芸術上の大きな転換を成し遂げたのだ、といわれる。

三崎時代を記念する作品には、詩集『白金の独楽（こま）』〈畑の祭り〉歌集『雲母（きらら）集』などがあり、いずれも人間的な匂いを強く感じさせる、光明礼賛の傾向が見られる。

それにしても白秋は何を急いでいたのだろう。散歩の途中か、それとも遠方からの帰り道だったのか、眺めの良さに長居をして、居宅へ急ぐことになったのか。ほとほと（おおかた、ほとんど）秋は過ぎてしまった。日は短く、風は冷たい。暗くならないうちに三崎へ着かなければ、の思いにもとれる。

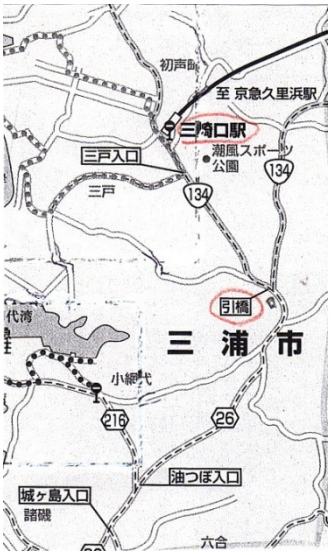
隠れるように転居した三崎の地は、白秋に新たな生を与えた。明るい風土と、おおらかな人びとに囲まれ、知らぬ間に季（とき）を過ごしてしまった。これではいけない。もういちど、切磋琢磨する友人達の集う世界に向かわなければを「秋は過ぎぬと思いき」と表現したのだろうか。向こうへ渡ろうとする心の中の橋が引かれてしまったら前に進めない。今を逃したら、谷へ落ちるばかりだ。自分は此処（ここ）で満足すべきではない。秋は短く歳月は待ってくれない。この橋を渡ってしまったなら、もう、かつての世界に戻れないのではないか。…深読みかも知れないが、若き日の白秋のそうした焦眉（しょうび）が、ほとほとの表現になったと思う。

現在、交通の要衝（ようしょう）になっている引橋は、当時、左右の山が迫る、いかにも村境の感じをひき起こさせる場所で、引橋断層の地でもある。そこは、また、三崎から長旅に出る人を見送る別れの地であり、雨水が東京湾か、相模湾かに分水する地でもあった。

引橋は、北原白秋が三崎時代以降に、詩はもとより、短歌・童謡・歌謡など、多彩なジャンルの作品を生み出したエポックともなる地であったといえる。

（2011 2/6　2013 3/12　歩く）

※3年ほど前までは小網代の森を見下ろす景勝地にあった（白秋碑）はそこから三崎方面に移された。



干潟の雑学（14）

巻貝の蓋のはなし、つづき

三浦地方ではその昔「百日咳にかかったらサザエの蓋三つを病人の頭にのせ、貝一つにつきすえれば咳が遠のく」と言う民間療法があったそうです。貝の蓋もさまざまな利用法があるようです。

小網代の干潟の周りに多く暮らす小さな巻貝にスガイ（Turbo(Lunella) cornatus coreensis (Recluz,1853)という貝がいます。スガイは酢貝と書きます。スガイはサザエ(Turbo(Batillus) cornutus Lightfoot,1786)と同じような硬くて厚い石灰質の蓋を持っています。この蓋を酢に入れると二酸化炭素を出して溶けながらくるくる回るのでこの名前が付けられたようです。実際にスガイの蓋を酢の中に入れてみましたが二酸化炭素の泡はたくさん出るのですが回ることはありませんでした。

スガイの蓋：右が外側より、左が内側より

蓋の石灰化について

石灰質の蓋で最もよく見られるのはラセン型に属する蓋で、同心円型と薄歯型のものでは稀です。最も進んだ型式の前核型、外核型、擬前核型では見られません。最も石灰化の肥厚したものはサザエ科(Turbinidae)（サザエ、スガイ、ウラウズガイなど）に限られ、石灰化という現象は蓋の進化過程の比較的初期に始まってまもなく最高に達して衰微したものと考えられます。ニシキウズガイ科(Trochidae)では有機質の蓋を持つものも多く、ウラウズガイ(Astralium haematragum (Menke,1829))（サザエ科）と貝殻の形態が良く似ているウズイチモンジ(Trochus rota Dunker,1860)（ニシキウズガイ科）は有機質の蓋を持っています。古腹足類では蓋の石灰化は何度も独立して進化した形質と考えられます。腹足類全体で見ると、石灰化の蓋を持つグループは少数派であり、蓋の石灰化はコストとの収支を見ると常に有利とはいえないのかもしれません。石灰化という現象は石灰の分泌に時間を要するので自然に回転が遅くなり旋回数の減少方向に向かいます。

アシヤガイの小さな蓋

殻口と蓋の関係

前鰓類の中で原始的な体制を持つオキナエビス（Mikadotrochus beyrichii (Hilgendorf,1877、オキナエビスガイ科 Pleurotomariidae)では蓋は円形で殻口の大きさよりもはるかに小さいですが、ニシキウズガイ科（Trochidae）では蓋は同じように円形ですが殻口よりも大きく蓋が斜めになって殻口を閉じるので殻口とよく合っていません。しかし、ニシキウズガイ科のアシヤガイ（Granata lyrata (Pilsbry,1890)）の仲間はちょっと例外的で一応持っていますと言うような小さな蓋を持っています。蓋は殻口を閉鎖して貝殻と共に外敵から軟体部を守るのに役立ちます。したがって蓋が殻口とよく合うのが原則的です。一般的に蓋が形態的によく発達したものではよく合い、退化的なものではうまく合いません。特に円形や卵形の石灰化した蓋は殻口によく合っています。生きたサザエの調理で蓋を外すには素早く“貝剥き”などを使って行いますが、失敗すると蓋と殻口に隙間がなくなり蓋を外すのに苦労します。

蓋の消失

巻貝で殻口の広大したものは蓋が消失します。たとえば、クロアワビ（Haliotis(Nordotis) discus discus Reeve,1846）などのミミガイ科（Haliotidae）では蓋がありません。タマガイ科（Naticidae）のツツミガイ（Sinum planulatum (Recluz,1843）では見落としてしまいそうな薄くて小さい蓋があります。 殻口の狭窄しているものにも蓋がありません。タカラガイ科（Cypraeidae）やフデガイ科（Mitridae）などです。陸貝のオナジマイマイ科（Bradybaenidae；ミスジマイマイなど）やナンバンマイマイ科（Camaenidae）やキセルガイ科（Clausiliidae）にも蓋がありません。ミスジマイマイなどでは殻口に粘液の膜（エピフラム）で蓋をして軟体部を乾燥から守り、キセルガイなどでは殻口の内壁に蓋に類似する弁状構造があります。小網代の森でも見られるタワラガイ（Sinoennea iwakawa (Pilsbry,1900)（ネジレガイ科、Streptaxidae）の殻口には歯状の突起が形成され、殻口が狭く複雑な構造になっています。成貝に蓋のない巻貝でもベリンジャー幼生期には蓋がありますが、変態後に蓋を捨ててしまいます。

タワラガイの殻口の歯

浮遊性の Janthinidae（アサガオガイ科）や寄寓性のハナズトガイ科(Velutinoidae)や寄生性のヤドリニナ類（ハナゴウナ科 Eulimidae）のような特殊な生活をしている巻貝にも蓋を持たない種があります。そのほか、ショクコウラ科（Harpidae），コロモガイ科（Cancellariidae），マクラガイ科（Olividae）,ヒタチオビ類（ Volutidae；ガクラボラ科），ヤツシロガイ科（Tonnidae）なども蓋がありません。これらの多くは海底の砂泥中に暮らしています。しかし蓋を持つタマガイ類も同じような生活をしているので、このような生活様式が蓋の消失の原因とは考えられません。

アマオブネガイ科ニシキアマオブネの蓋（関節型）の内側下方の突起

蓋の型式と類縁

蓋の大きさ、石灰質と角質の厚さ、表面と裏面あるいは周縁の肥厚の程度、凹凸などは科や属において変異がありますが、型式は変わらないものが多く、多くの腹足類では蓋の形態は科レベルで一定であることが多いですが、同じ科の中で蓋が異なる例もいくつかあります。（ムカデガイ科(Vermetidae)、トウカムリガイ科(Cassidae)、ガクフボラ科(Volutidae)、など）

巻貝には蓋をもつもの、持たないもの、石灰化した丈夫な蓋をもつものなどさまざまですが、これらはそれぞれの生態とも関係しているので大変面白いです。

巻貝類では殻の先端に残っている変態前の殻（原殻、protoconch）を調べることで初期の発生を推定することができます。しかし、アマオブネガイ科(Neritidae)は海岸の波が強いところに暮らしている種が多く、多くの個体は原殻を含めて貝殻が浸食により失われています。そこで、アマオブネガイ科の持つ石灰質の丈夫な蓋の構造を細かく観察することでその幼生の発生様式が調べられています。アマオブネガイ（Nerita (Theliostyla) albicilla Linnaeus,1758）は石灰質の蓋を持っているので、殻を両方の手で挟んで少し強くもむと“コトコト“という音がするのでコトコトガイとも呼ぶことがあります。この貝は小網代のイギリス海岸でも見ることができます。

参考資料:
貝類雑誌16(1－4)1950:腹足類の蓋の形態学的考察、
狩野先生の研究(2007)
海辺の生物、カラー自然ガイド17)、西村三郎、山本虎夫、保育社、1974
生物方言「シタダミ」の分布についての一考察、川名興、千葉生物誌24(1, 2)P1-34,
千葉県生物学会、1975

（小倉雅實）

いちご川だより Vol.6

◆“モントレイ”

学期が始まると、バークレイの学生は、なりふり構わず勉強します。講義の数自体はそれほどでもないのですが、次の講義の準備や、次々迫ってくるペイパー(レポートのことです)の準備やら、教授やティーチングアシスタントに相談にいきまわったり、 それは毎日、気がつけばあっという間に過ぎていきます。そのかわり、休みとなると、たいてい、徹底的に遊んでいます。僕は、この間の春休みは、モントレイという所に行ってきました。

サンフランシスコから南へ車で2時間くらいの場所です。距離にすると200km です。僕は、アムトラックという列車を使って行ってみたかったのですが、一日数本のこの列車は大陸をはるばる横断してきます。ですから、遅れるとなると、12時間遅れ、なんてことも普通にありえることなので、サンフランシスコ空港から出ているシャトルバスに乗っていきました。南に行くということなので、暑くても苦しくないように半袖などを用意して、仕度をして行きました。ところが、寒いんです!! 風がひんやり冷たくて、フリースがいるくらいでした。泊った宿屋には、暖炉がありました。バスの運転手さんは、地元出身の方で、「海なんて入ったことないよ。よっぽど水温があがっても、ウェットスーツみたいなの、着るなあ」とか言っていました。つまり、近くを流れているサンフランシスコ海流は寒流で、とっても寒いのです。

海岸では、アシカがあちこちでごろんごろん寝っ転がっています。沖合を眺めれば、イルカも肉眼で見られます。海はとってもきれいです。

僕の目当ては、モントレイベイ水族館です。世界で初めての屋内水族館ですが、水槽が海の景色とリンクしています。シカゴのシェッド水族館も、同じです。つまり、水槽と海を一緒に見ることができるのです。ですから、自分も海のそばにいる生きもののひとつ、という感じがして、とても楽しいです。僕は、油壺マリンパークが大好きですが、イルカショーの場所が、将来海とリンクするとうれしいな、と思います。

バークレイにもどってから知ったのですが、モントレイの9月のジャズフェスティバルは、有名だそうです。それから、昔の映画の『エデンの東』の舞台だそうです。

ジポーリン周樞

小網代を詩う

案内板

中井　由実

森の入口の水道広場
そこへくだる坂道の踊り場にあたる一角に
この夏　新しい案内板ができた
なめらかなコンクリートの台に茶色の柱
左を示す濃茶の面に白い字体で
「小網代の森」

それを見て
楽しく森を歩いていたはずの時代に
ある恐れを抱いていたことに気がついた
――　小網代がつぶされてしまったらどうしよう　――
当時この道にあったのは　目には見えない
「私有地　立ち入り禁止」の看板だった
笑いながら、驚きながら、歓声をあげながら
私たちはいつも
森との別れが来ることを恐れていた

いったい誰に思い込まされてきたのだろう
経済は自然が嫌い
発展は緑を厭うべし　などと
巨大なゴミ捨て場にするといわれたこともあったけれど
今　誰の目にも明らかに
小網代の森は小さくて大きな自然として
私たちの前に広がっている

もう大丈夫ですよ
ずっとここにいることになったから、
濃茶の案内板は
そう告げるために建てられたのだ

ずうっとよ、
私のつぶやきは
谷をくだりはじめた人には届かなかっただろうけど

そのまま

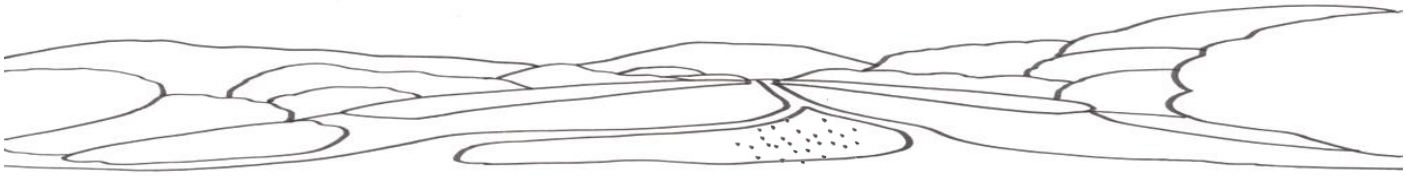
中井　由実

とんびが上空から見ている
大きく拓かれた　えのきテラス
疑問符のかたちの弧をえがきながら

ずいぶんにぎやかにしていたけれど
そうかい、
森と谷で　まるごと
残ることになったんだねえ

干潟のゆりかごの小さな住人　その１７

蟹さんたちはお休み
そして
冬だって干潟の季節



ジポーリン菜穂子

ありがたいことに。森と干潟が結んでくれた仏縁がございまして。「お十夜」なるものに、先月伺いました。鎌倉の光明寺です。小網代の入り江を相模湾に沿って北に行くと、三戸浜、長井、葉山、逗子、そして鎌倉の材木座。この材木座海岸沿い、すぐそばにあるのが光明寺です。山門を入って、大殿手前左奥の蓮池は、どうやら小堀遠州作だそう。大殿右側には、三尊五祖来迎の石庭。どちらも仏教のありがたい教えを表しているお庭です。格調高く、由緒あるお寺です。浄土宗のお十夜を最初に始めたお寺でもあります。お十夜の間は、境内から沿道まで、ずっと露店が続き、たいした賑わいです。この世俗のざわめきと、大殿の清らかな空間。聖と俗がまじりあった空気の中、大殿で拝見いたしましたのが、稚児舞でございます。

「乳飲み子（ちのみご）」から、稚児という言葉になったそうですけれど。古代から、大きなお寺では、貴族の子供の行儀見習いやら、頭が良さそうだったり、芸事に才能がありそうなお子たちを、世話係として、預かっていました。こういった子どもたちが「稚児」です。清らで無垢な稚児は、聖なるものとして、お祭りでは、大活躍。*　舞楽や田楽をつとめてきたそうです。ところで、能の仕舞でもわかるように、お舞いでは頭を上下させません。常に一定です。舞のみならず、剣道などでもそうです。元気よく跳躍している剣士は、まだまだ初心者だそうな。達人ともなると、頭の位置が変わらないまま、あっという間に一本先取です。ところが、光明寺で拝見しました稚児舞は、時折みんなそろって背伸びをして、頭をぴょこたんさせていました。それが、無垢な子どもを表しているようで、なんとも愛らしいのです。

干潟にも、いますね。それは愛らしいおチゴさまが。そう、チゴガニです。こちらも、ハサミをぴょこたんぴょこたんさせています。春から初冬限定ですけれど。今は干潟の穴の中で、もう冬眠。春になり、動き始めると、観察で私たちも忙しくなってしまいますから。今のうちじっくり。いろいろ考えを深めたり、想像を巡らせたり、春の訪れを愉しみにしたり。いろいろないのちが休んでいる冬ならではの愉しみ。春になると、バンザーイバンザーイをしながら、オスチゴガニが干潟で出迎えをしてくれます。**　１センチほどの碧い甲羅の、それは小さな、かわいらしい蟹。小さいから稚児蟹なんでしょう。学名Ilyoplax pusilla　も「小さなカニ」の意味。オランダのウィレム・デ・ハーン (Wilhem de Haan 1801-1855)という学者の命名(1835)です。シュレーゲルアオガエルの命名者となったシュレーゲルやテミンクと一緒に、シーボルトが日本滞在中に集めた標本を研究し『日本動物誌 (Fauna Japonica)』を刊行しました。シーボルトが日本に滞在したのは、ちょうど伊能忠敬が日本地図を作っていた頃。外国船打払令が出たり、いわゆるシーボルト事件になったりして、文政年間のうち、日本に滞在したのは、わずか４年です。その間に、あれだけの標本を集めたのですね。しかも、瀧さんというすてきな伴

侶も得ていますし。イネさんという娘さまもできましたし。日本の甲殻類の命名は、デ・ハーンによるものが多いそうです。それだけ、たくさんの標本があったということですね。

可愛らしい稚児蟹のとなりで、いかめかしく大きな白いハサミを振りかざしているのは、ハクセンシオマネキ。学名のUca lactea は、「ミルクなカニ」の意味。ハサミが白いからでしょうか。こちらの命名(1835)も、デ・ハーンです。漢字で書くと、白扇潮招。白い扇で潮を招いているかのようだからでしょうね。白い扇というのは、お祝いのときに使われます。開くと末広がりですし。能では、扇は聖なるもの。神さまが宿ります。お経が書かれたりもしました。お侍さまにとっては、白扇は上級武士のしるし。白扇術なる武術もあります。武士の白い扇といえば、平清盛公ですかね。保元・平治の乱で力を得た平安末期の武将。日宋貿易に力を入れました。貿易の航路確保のために広島県呉市と倉橋島の間の、とっても狭い海峡の幅を広げたそうなのです。音戸の瀬戸と言われているところです。その工事を、潮の良いその日一日で終わらせたい清盛公は、沈みかかった夕日を、もとに戻したのです。どうやって？白い扇でひたすら、仰いだのですってよ。平安末期から始まった日宋貿易は、894年に遣唐使が廃止されて以来の大陸とのおつきあいです。その拠点となったのは大輪田泊（おおわだのとまり）。今の神戸です。清盛公は、そこに雨風と波を避けるために人工の島を造るなども、しました。その島は、扇形で、お経が扇に書かれたことから、経が島という名前だったそうですが、今は、残っていません。

ハクセンシオマネキの扇は、はたして夕日もおしもどすのか。英語では、フィドラー・クラブ（fiddler crabバイオリン弾き蟹）です。*** 故森繁久彌さんの十八番だった『屋根の上のバイオリン弾き』というミュージカル、覚えていらっしゃいますか。いろいろ名曲がございましたね。原題は「屋根の上のバイオリニスト」でなく、「屋根の上のフィドラー」なんです。バイオリンも、フィドルも、同じバイオリンですが、バイオリンやバイオリニスト、というとコンサートホール、タキシード、のイメージ。かたやフィドルの方は、小さな楽器を手元において、畑仕事の終わった後で、野良着、のイメージ。まさに、迫害を受けて逃げるときにも、持っていけるような。楽器は心を表しますが、バイオリンという楽器ほど、気持ちを微に細に表現できる楽器はないそうです。そんな楽器を、いつでも、きっと携えていたのですね。

コンサートホールでなく、干潟で弾くバイオリンですから、「バイオリン」でなく、やはり「フィドル」でしょうね。蟹も「バイオリニスト」でなく「バイオリン弾き」ですね。大きなハサミが、バイオリンで。潮を招いているかの様子が、まるで、演奏を始める前にバイオリンを手元にもってくるときの動作のようだから。大きなハサミを掲げながら、小さいハサミで砂の上のエサを漁る様子が、まるで、弓を動かしているようだから。バイオリンを弾いているのは、オスガニです。メスガニを惹きつけるためだそうですけれど。人間になおすと、体と同じくらいの大きさの腕をもった男性ですよ。どんなん？もちろん、争いにも使うそうです。でも、チャンバラみたいには、使いませんよ、だって、折れちゃったら、いやだから。ハサミの根元に歯のようなものがあって、これで相手に噛みつくのです。それから、この大切な大切なバイオリン、体温調節にも役立ってい

Fiddler on the Tidal Flats

るそうな。****

アメリカ合衆国のミシシッピ川沿いで育ったマーク・トウェインに、ミシシッピ川の生活の回想録がありますが、ニューオーリンズでは、「バイオリン弾き」が足の踏み場もないほど、いたそうですよ。ジャズの街だからなあ。いえいえ。人間でなく、蟹さんの方ですよ。マーク・トウェインといえば、言わずもがな。『トムソーヤの冒険』や、『ハックルベリーフィンの冒険』の作者ですね。トムソーヤは、やんちゃの代名詞として、使われていますよね。ユーモアあふれる作品は多いですが、なかなか人間観察は鋭く。「人間は最下等動物」などと言い放っています。アメリカもキリスト教文化の国ですから、「神の真実」に一番近い人間が一番偉い。でも、そんなことないんじゃないか、という疑問を呈したのですね。日本やアジアでは、仏教のせいか、「生けとし生けるもの」で、人間もあくまでも生きもののひとつ、と考えられているように思います。動物を助けるお話もありますけれども、偉いから、助けてあげるのではなく、「たまたま助けてあげられるから、助けるけど、今度ボクが困ったら、助けてね、カニさん」という互助会的な。『万葉集』には、葦蟹の気持ちになって、詠われている長歌がありますよ。「なんだか、アシガニのボクが、大君の前に召されるってことだから…。歌人としてであろうか、笛吹きだと思われたのだろうか、はたまた、琴弾きとして…。と思っていたら、縄でくくられ、天日で干され…。あれえ、大君が、塩をふって、ボクを食べようとなさるぅ。」（『万葉集』巻十六）正岡子規の次の句はいかがでしょう。

五月雨や　蟹の這ひ出る　手水鉢

この句を、人間はエライの構図の中で読んでも、ちっともおもしろくないですよね。蟹との一体感というか、いわゆる目線が同じと思って読むと、じわじわとおかしい。

さてさて、川育ちのマーク・トウェイン。そのペンネームも、川の蒸気船の水先案内人への合図の言葉から。「よぉ！（もう浅さが）２つだぞぅ！」という意味です。２つというのは3.6mほど。座礁しないように、浅瀬に気をつけて航行したのですね。「水深二尋」と訳されたりします。清盛公も、航路の安全には、力を注ぎましたが、鎌倉時代の鎌倉でも、日宋貿易の船が座礁しないように、心を砕いていました。材木座海岸は昔から遠浅で、難破してしまう船も多かったそうで。そこで、いのちを救うべく、勧進僧の往阿弥陀仏たちが、北条泰時の協力のもと、伊豆石を使って、島を築いたそうな。和賀江島（わかえじま）です。『吾妻鏡』や「東関紀行（とうかんきこう）」に書かれています。これは、今も残っているんですよ。国内で現存する最古の築港遺跡です。光明寺前に広がる石原が、その和賀江島です。遠浅なので、大潮の干潮には、歩いていくことができます。

さあ、今ごろは、小網代のお稚児さまたちも、清盛さまも、もうお休み。もちろん、アカテガニも。ゆっくり休んでいてね。また、春に会おうね。

＊　室町時代に書かれた「御伽草子」には、稚児のことが書かれている作品がたくさんあります。観音菩薩の化身として描かれているものもあれば、稚児と僧侶の恋愛が描かれているものもあります。源義経や武蔵坊弁慶もお稚児さまの出身です。（『御伽草子』岩波文庫／『室町時代物語大成』角川書店）

＊＊　チゴガニやコメツキガニの砂団子やウェービングなど、詳しいことは、『愉しい干潟学』(八坂書房 2014) 19~22 頁（小倉さん筆「カニの食事とダンスの話」）をご参照くださいませ。

＊＊＊　『愉しい干潟学』139 頁「小倉さんの干潟愛コーナー」をご参照くださいませ。

＊＊＊＊　ハサミの形状と使い方に関しては：

Brook O Swanson, Matthew N George, Stuart P Anderson and John H Christy. 2013. Evolutionary variation in the mechanics of fiddler crab claws. BMC Evolutionary Biology 13: 137

体温調節に関する研究は：

M. Z. Darnell, K. K. Fowler, P. Munguia. 2013. Sex-specific thermal constraints on fiddler crab behavior, Behavioral Ecology 24:991-1003

参考にした本：

杉田治男 編『水族館と海の生き物たち』(恒星社厚生閣 2014)

村井実『シオマネキー求愛とファイティング』(海游舎 2011)

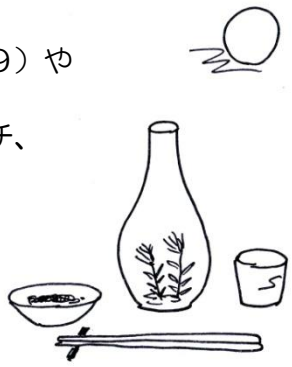
マーク・トウェイン『ミシシッピ河上の生活』勝浦吉雄訳 (文化書房博文社 1993)

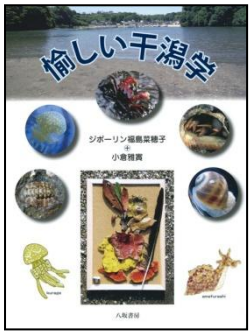
『人間とは何か』中野好夫訳 (岩波文庫 1973)

「東関紀行」『中世日記紀行集』新編日本古典文学全集　小学館

小倉さんのディープな干潟愛コーナー

ハクセンシオマネキとのお話でしたので楽しみにしておりました。
今回は稚児、平清盛など日本のいにしえ、平安を感じますね。
チゴガニの名前についてはよくわかりません。
おそらく明治以降に付けられた名前と思われます。
江戸時代の「長門産物之内被登下図正控」（元文三年１７３８）
の絵図にチゴガニと思われる絵がありますが、これには「タイトウ」
と名前が付してあります。タイトウの語意は不明です。
シーボルトが日本に滞在した文政年間には「丹州蟹譜」（文政二年１８１９）や
「紫藤園蟹図」（文政十年１８２７）などカニの図鑑？も出ています。
シオマネキにはカタツメガニ（片爪蟹）、テボウガニ（独螯蟹）、ヤリモチ、
などの名前もあります。九州の有明海あたりではマガニと呼ぶそうで、
この辺りではシオマネキが主要な食用のカニであったようです。
「ガンヅケ」「マガニ漬」という名前のシオマネキの塩辛が有名ですね。
晩秋の干潟に昇る月を眺めながらこの塩辛でお酒など・・・
小網代のシオマネキはどう思うでしょうかね。



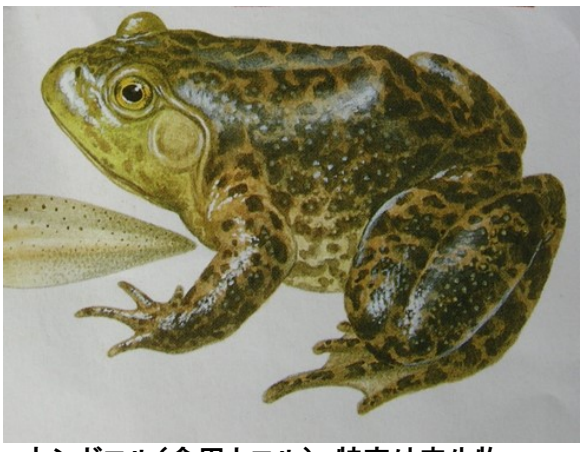


★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆

冬だって干潟の季節。いえ、冬こそが干潟学の季節。ぜひぜひ、『愉しい干潟学』をコタツの友として、お愉しみいただきたく。これまでの、小倉さんと私の記事をまとめました。『つうしん』で読むのとは、また別の味わいです。松下さんの光の妖精が湿地に遊んでいるかのような写真と、ハル画伯のとにかく遊び心にあふれたイラスト（しかもところどころカラーです !! ）で、ふんわか気分!! ぜひぜひ!! お試しいただきたく!!
『森の住人たち』も、もちろんよろしく !!

スタッフコラム

◆ アメリカザリガニとウシガエル　　２０１４.１１.５



ウシガエル（食用カエル） 特定外来生物

小網代の干潟近く旧別荘内に小さな池がある。池中を棲家として生息する大型カエルであるウシガエルを幾度か見ている。文字どおりウシのような太い鳴き声を聞いたことがある。ある時は、石の上で仲良く2匹並んでいるのも確認している。

ところが、この池内にはアメリカザリガニが生息していたという話は聞いたことはない。つまり、ウシガエルがいる所ではアメリカザリガニは食べられてしまい生息できないようである。そのウシガエルが固い甲羅のアメリカザリガニを頭からバリバリと食べている写真も見ている。

今では、子供たちに大人気で「エビガニ」と呼ばれて水辺の親しい生き物となっている。アメリカザリガニは雑食性で強い繁殖力と環境適応力があり生態系全体が破壊されようとしている。

ウシガエルは調べてみると、遠い昔の大正8年（1919）に食糧として北米から北海道を除く日本各地へ移入されて定着してきたという。幼いオタマジャクシの時代でも、他のカエルのオタマよりも5倍位の大きさがある。

アメリカザリガニ　要注意外来生物

アメリカザリガニは、そのウシガエルの餌として大正末期（1925）頃から移入されてきたものといわれる。記録によると、北米から100匹を船で運び我が国へ着いた時は僅か10匹が生存していた。故郷の沼地に似た水田があったことで、住みやすく定着して全国各地へ広がっていったものである。

やがては外来生物として、日本国中の生態系の食物連鎖へ組みこまれていくようになった。現在、離島等へは在来生物を脅かすことのないよう持ち込みは厳禁である。

池やビオトープ、水田内へ大量に棲みつき、水の涸れた田圃では株元へ穴を掘って冬眠する。現在、神奈川県内各地ではアメリカザリガニが大発生して対応に苦慮していると情報が寄せられてきている。行政のアドバイスやボランテア団体の積極的な捕獲運動が活発である。

平成24年（2013）11月、海老名市でアメリカザリガニ対策の勉強会・捕獲成果の発表会があり、県や各市の担当者が参加して私も同席した。池や小川の茂みへ「アナゴ用のカゴ網」を用意して、場所を選び大形や小形のカゴを幾つもセットする。捕獲されたアメリカザリガニはメスとオスを分類し総計を数え、総重量を測定記録する。アカテガニと同じでハサミはメスの方が小さい。腹部を見ると、産卵したタマゴや孵化したコドモは数多い副脚に抱えられ脱皮を繰り返し育ってゆく。この辺りの育て方はサワガニと同じである。

やっと、捕獲しても網の目の粗い間からパラパラとコドモが抜け落ちてしまうので、底の網目へ木綿の布を張ったという苦労話もあった。

祖父川精治

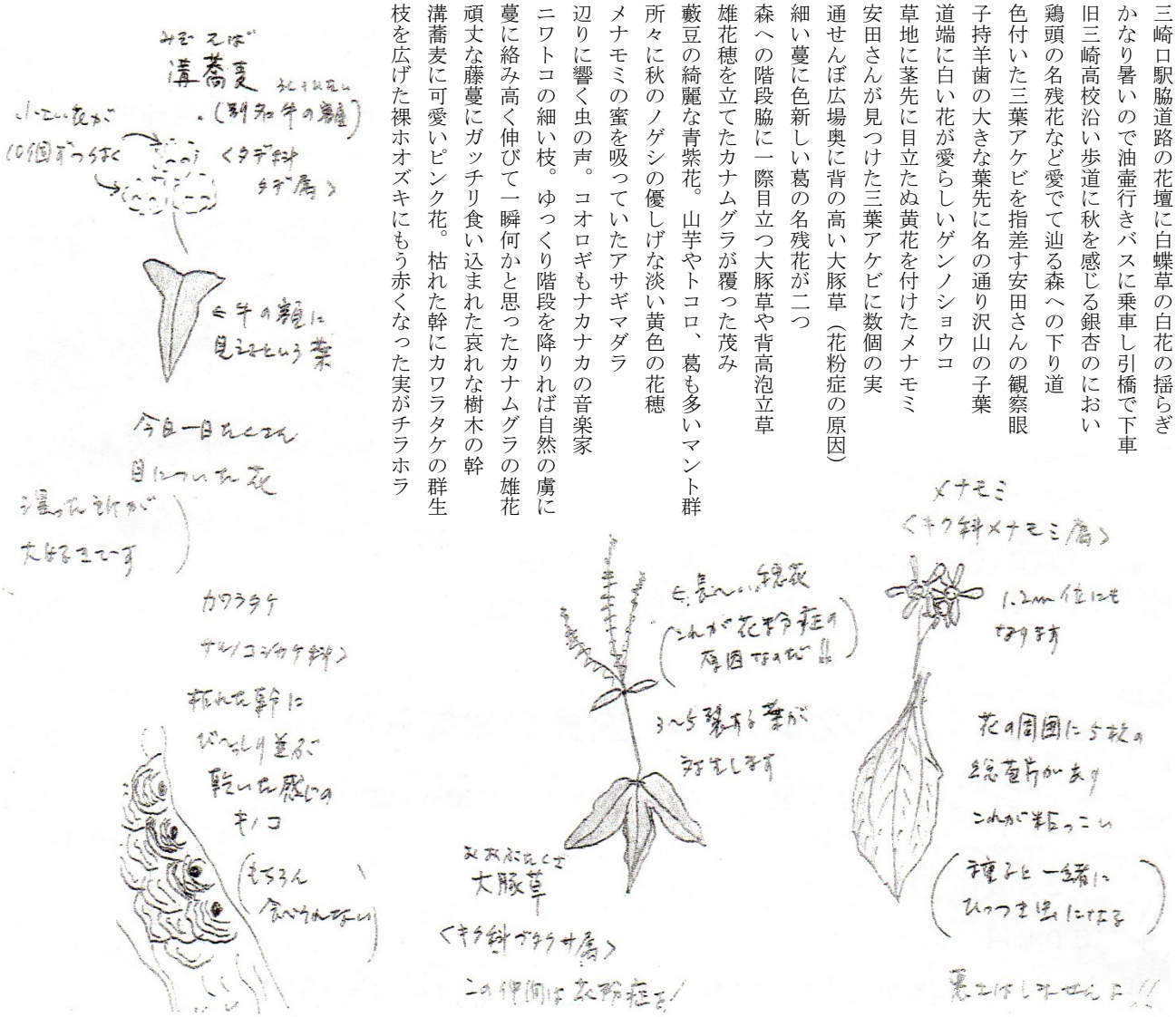
森の隅っこで！

２０１４年７月２０日の開放いらい森でであった方々の声を不定期でお届けします。

９月某日、白髭神社の近くで2人連れの方から声を掛けられました。以前、素敵な森の散策記録を見せてくださった方でした。今回も記録を書かれるらしい。できあがったら拙宅の近くなので届けてくださるとのこと。

読み終わってお礼の電話の中で部分掲載のお許しを頂きました。8ページに亘る散文詩のような文とかわいい植物の絵とコメント。今回は森入り口の長い階段を下った所までをご一緒に。続きは次の機会のお楽しみに。

平成二十六年九月三十日（火）安田さんと訪ねた一般開放された秋の小網代の森
北久里浜駅で安田さんと電車で合流
三崎口駅脇道路の花壇に白蝶草の白花の揺らぎ
かなり暑いので油壷行きバスに乗車し引橋で下車
旧三崎高校沿い歩道に秋を感じる銀杏のにおい
鶏頭の名残花など愛でて辿る森への下り道
色付いた三葉アケビを指差す安田さんの観察眼
子持羊歯の大きな葉先に名の通り沢山の子葉
道端に白い花が愛らしいゲンノショウコ
草地に茎先に目立たぬ黄花を付けたメナモミ
安田さんが見つけた三葉アケビに数個の実
通せんぼ広場奥に背の高い大豚草（花粉症の原因）
細い蔓に色新しい葛の名残花が二つ
森への階段脇に一際目立つ大豚草や背高泡立草
雄花穂を立てたカナムグラが覆った茂み
藪豆の綺麗な青紫花。山芋やトコロ、葛も多いマント群
所々に秋のノゲシの優しげな淡い黄色の花穂
メナモミの蜜を吸っていたアサギマダラ
辺りに響く虫の声。コオロギもナカナカの音楽家
ニワトコの細い枝。ゆっくり階段を降りれば自然の虜に
蔓に絡み高く伸びて一瞬何かと思ったカナムグラの雄花
頑丈な藤蔓にガッチリ食い込まれた哀れな樹木の幹
溝蕎麦に可愛いピンク花。枯れた幹にカワラタケの群生
枝を広げた裸ホオズキにもう赤くなった実がチラホラ



同じ日、エノキノテラスでまとまって句の選をしておいでの成熟男女に声を掛けられました。三浦の俳句のグループ「一行詩の会」の皆さんでした。しかも神奈川新聞の俳壇でよく採用されていてお名前だけを存じている方が主宰。快く渡して下さった今日の成果の一部を紹介します。

天　高し　森のガイドは　手で語る　　秦　孝浩
語り継ぐ　棚田に　沙魚（はぜ）の研究所　　佐原　寛
数珠玉の　結び初めたる　棚田跡　　兵頭逸子
こもれ日に　生きる力を　竹の春　　小野寺廣子
干潟にも　鯔（いな）っ子　泳ぐ　潮だまり　　宮川　せい

10月初旬友達を案内して森散策。

エノキノテラスでスケッチをしていた戸塚区の男性がノートを切って森散策の感動を書いて渡してくださいました。

「白髪でも　腰曲げ　魅する　すすき穂の」　斉藤　博

記　宮本美織

小網代の森と干潟を守る会の活動

9/27　通信 136 号印刷発送　（於 横須賀市立 市民活動サポートセンター）

9/28　三浦半島まるごと博物館フォーラム　（於 ヴェルクよこすか）参加

10/25 第 122 回自然観察会＆クリーン「今、小網代の植物が面白い！」

スタッフ会議（於 KISHI ハウス）

三浦まるごと博物館連絡会主催フォーラムでポスター展示

去る 9 月 28 日、横須賀市のヴェルクよこすかで開催された「三浦半島フォーラム」では三浦半島活断層調査会による最近の調査研究をもとに「三浦半島のいま、私たちが備えることは」というタイトルで発表が行われた。約 100 名の出席者は活断層の分布や過去の地震被害の歴史的資料などに興味深く聞き入っていた。小網代の森も干潟と海につながる以上、津波に襲われることは必定で、避難方法について改めて確認する必要を実感した。

フォーラムの後参加団体によるポスター展示の発表会がもたれ、5 分の持ち時間でそれぞれの活動報告を行い、三浦半島で活動する各種団体の現状が披露された。「小網代の森と干潟を守る会」もオープンされた森と「NPO 小網代野外活動調整会議」の活動の現状を発表して、森へのお誘いと「神奈川トラストみどり財団」への入会案内と支援についてお願いした。（伸）

2015 年 オリジナルカレンダー 販売のお知らせ（限定30部）

小網代の森と干潟から切り取った写真をレイアウト。改めて、「小網代は美しい！」と改めて感じるカレンダーセットです。

発売日　１２月６日（土）　　定価　５００円

送　料　１２０円（複数部は送料が異なりますのでお問い合わせください）

申込み　郵便振替で通信欄に「2015 カレンダー」とお書きになり
下記口座にお振込ください
記号番号　００２６０－４－２１５６９
加入者名　小網代の森と干潟を守る会

※ １２月６日（土）三崎口駅前の、自然観察＆クリーン参加受付時にもお分けします。

ご寄付ありがとうございます

須田漢一様　大高義彦様　山本勝久様

以上の方からご寄付をいただきました、ありがとうございました

小網代の森が紹介されています

◆ 7月 18 日 朝日新聞夕刊一面で紹介されました

源流から湾まで丸ごと残る生態系　三浦半島・小網代の森

大内悟史　2014年8月18日 16時23分

印刷　メール

シダの茂る源流付近を散策するエコツアーの参加者＝7月26日、神奈川県三浦市、内田光撮影

関東・東海地方で唯一、河川流域全体の生態系が保たれている「小網代（こあじろ）の森」（神奈川県三浦市）。この夏、源流から河口までの散策路ができ、親子連れやハイカーらでにぎわっている。荒れた里山が、30年の保全活動で豊かな自然を取り戻した姿が見られる。新たな観光資源として、人口減に悩む自治体や地元企業も期待する。

■30年かけ、荒れた里山戻す

「わあ、ジュラシック・パークみたい」。散策路が一般開放された7月20日、シダの群落に女性利用者が感嘆の声をあげた。小網代湾に流れ込む浦の川の源流付近は昼も暗く、涼しい。

ログインして続きを読む

無料登録して続きを読む

残り:1605文字／本文:1862文字

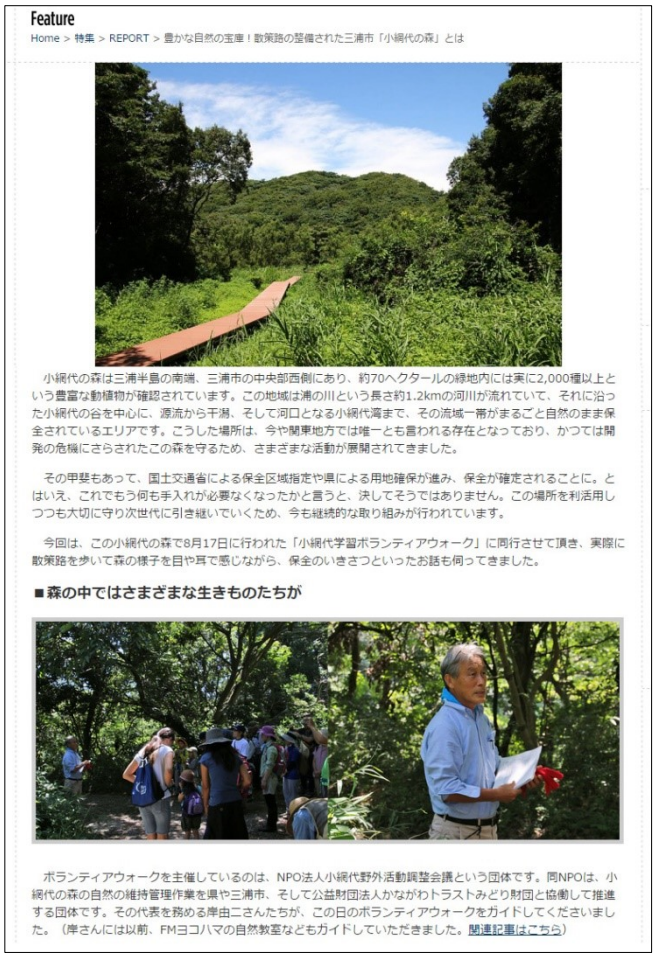
登録手続きがカンタンになりました。

無料会員は1日3本まで、有料会員は何本でもお読みいただけます。

朝日新聞 DIGITAL の記事を引用させていただきました。

http://www.asahi.com/articles/ASG7T5H8LG7TUTIL01F.html

◆ 8月 26 日 Fm ヨコハマホームページに
7/17NPO 法人小網代野外活動調整会議の
ボランティアウォークの様子が紹介されました。



Feature

Home > 特集 > REPORT > 豊かな自然の宝庫！散策路の整備された三浦市「小網代の森」とは

小網代の森は三浦半島の南端、三浦市の中央部西側にあり、約70ヘクタールの緑地内には実に2,000種以上という豊富な動植物が確認されています。この地域は浦の川という長さ約1.2kmの河川が流れていて、それに沿った小網代の谷を中心に、源流から干潟、そして河口となる小網代湾まで、その流域一帯がまるごと自然のまま保全されているエリアです。こうした場所は、今や関東地方では唯一とも言われる存在となっており、かつては開発の危機にさらされたこの森を守るため、さまざまな活動が展開されてきました。

その甲斐もあって、国土交通省による保全区域指定や県による用地確保が進み、保全が確定されることに。とはいえ、これでもう何も手入れが必要なくなったかと言うと、決してそうではありません。この場所を利活用しつつも大切に守り次世代に引き継いでいくため、今も継続的な取り組みが行われています。

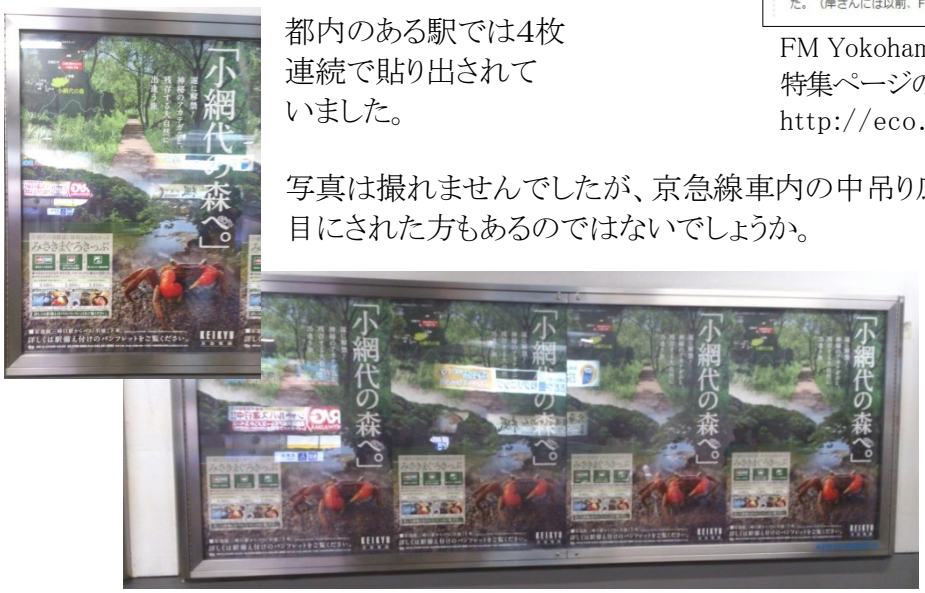
今回は、この小網代の森で8月17日に行われた「小網代学習ボランティアウォーク」に同行させて頂き、実際に散策路を歩いて森の様子を目や耳で感じながら、保全のいきさつといったお話も伺ってきました。

■森の中ではさまざまな生きものたちが

ボランティアウォークを主催しているのは、NPO法人小網代野外活動調整会議という団体です。同NPOは、小網代の森の自然の維持管理作業を県や三浦市、そして公益財団法人かながわトラストみどり財団と協働して推進する団体です。その代表を務める岸由二さんたちが、この日のボランティアウォークをガイドしてくださいました。（岸さんには以前、FMヨコハマの自然教室などもガイドしていただきました。関連記事はこちら）

FM Yokohama 84.7
特集ページの記事を引用させていただきました。
http://eco.fmyokohama.co.jp/category/feature

◆ 京急三崎まぐろ切符のポスター



都内のある駅では4枚
連続で貼り出されて
いました。

写真は撮れませんでしたが、京急線車内の中吊り広告を
目にされた方もあるのではないでしょうか。

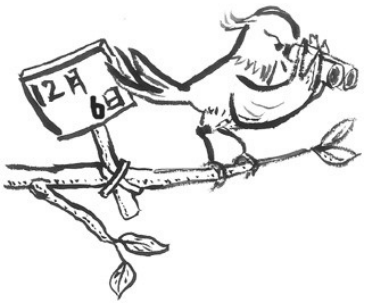
◆ 三浦市広報「三浦市民」8月1日号に小網代の森の特集が組まれました。
広報誌をお持ちでない方も、三浦市のホームページでバックナンバーをご覧になれます。
http://www.city.miura.kanagawa.jp/kyoudo/kouhou/kouhoushi_index.html

第 123 回自然観察＆クリーンのお知らせ

主催：小網代の森と干潟を守る会

◆木道からの快適鳥見!!

冬鳥が揃う季節です。これまでは草木に囲まれた道からの探鳥で鳥の姿を見つけにくかったのですが、今年は木道ができ、一段高い場所からの探鳥になるため、多くの出会いを期待しています。野山の鳥をさがしながら中央の谷を下り、小網代湾では水辺の鳥を探します。



日　　時：12 月 6 日（土）
集　　合：10:00 京浜急行三崎口駅改札前（トイレがありませんので必ず駅で済ませてください）
解　　散：14:00 ころ 現地解散
参 加 費：無 料
講　　師：別府史朗氏
申し込み：当日現地で受け付けします
持ちもの：お弁当、飲み物、手袋、防寒具（お持ちの方は図鑑や双眼鏡など。）
お問合せ：046-889-0067（仲澤）

新入会員募集のお知らせ

小網代の森と干潟を守る会への入会を希望される方は、下記の口座に年間会費をお振込みください。その際、 通信欄に 「入会希望」とお書き下さい。入会金は不要です。

年間会費（2013 年 7 月～2014 年 6 月）は、通常の会員は 1,000 円、賛助会員は 5,000 円で、いずれも振替料金のご負担をお願いしております。

口座： 郵便振替（00 の払込取扱票） 00260-4-21569 小網代の森と干潟を守る会

＊ 小網代の森と干潟を守る会の入会は随時受け付けておりますが、会員年度は 7 月から翌年の 6 月末までとなります。中途入会の方には会報「小網代 森と干潟つうしん」のバックナンバーをお送りします。またメールアドレスをお書きいただいた方には会員専用ページの ID とパスワードをお知らせします。

トラスト緑地保全支援会員のおすすめ

◆トラスト緑地保全支援会員になるには

かながわトラストみどり財団のパンフレットにある申込書に記入して郵送します。またはトラスト財団のホームページ（http://ktm.or.jp）から、申し込むことができます。トラスト財団のパンフレットは観察会の折にもお配りしていますのでご利用ください。支援したい緑地にはぜひ「小網代の森」をお選びください。通常のトラスト会費（大人 2000 円、中高生 1000 円、小学生 500 円、家族会員 3000 円）の他に 3000 円の支援会員会費が必要です。 小網代の森をよろしくお願いします。

小網代 森と干潟つうしん　NO.137　2014 年 11 月 23 日発行
森も海も干潟も 奇跡の集水域生態系を未来の子どもたちへ
小網代の森と干潟を守る会
〒238-0111 神奈川県三浦市初声町下宮田 261-5
代表 高橋 伸和　E-mail: info@koajiro-higata.com
電話 046-889-0067（副代表 仲澤）
URL: http://www.koajiro-higata.com
年会費: 一般会員¥1000 賛助会員¥5000（7 月～6 月 入会金不要）
郵便振替 口座 00260-4-21569　加入者名 小網代の森と干潟を守る会
＊ 既に退会のご連絡をいただいた方にも年度末（6 月末）までお届けしております